



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	齊物と観物
Author(s)	松川, 健二
Citation	北海道大学人文科学論集, 14, 19-29
Issue Date	1977-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34328
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_PR19-29.pdf



齊物と觀物

松川健二

はじめに

本稿は莊周万物齊同思想の後世への影響の一態様として、宋代の代表的思想家邵雍の「觀物」を取りあげ、「齊物」との関係を論じようとするものである。

邵雍に関しては最近新しい研究がなされつつある⁽¹⁾が、邵雍を莊周との関連に力点を置いて論じたものとしては、筆者寡聞にして錢穆『中國思想史』を知るのみである。ところでこの「觀物派の哲学」なる規定⁽²⁾は、趣旨は諒解できるにしても、なにぶん通史の中の一節であつてみれば論じ得ておおまかに過ぎ、就中「觀物」を論じて、「齊物」の一語にだに言及せぬ点は補わるべきものと思う。

(一)

さきに邵雍（一〇一—一〇七一）の思想を説くに当り、手掛りとしてその「放言」と題する詩を掲げ、その解説をすることから始

めよう。

既得希夷樂 既に希夷の樂しみを得

曾無寵辱驚 曾て寵辱の驚き無し

泥空終日着 空に泥みて終日着し

齊物到頭爭 物を齊しくして到頭爭ふ

忽忽閑拈筆 忽忽 閑にして筆を拈^{つま}み

時時自寫名 時時 自ら名を写^かく

誰能苦眞性 誰か能く眞性を苦しめ

情外更生情 情外更に情を生ぜん (伊川擊壤集卷三)⁽³⁾

既得希夷樂

邵雍の學問の系符について友人程顥（一〇三—一〇八五）はその「邵堯夫先生墓誌銘」において、

先生得之於李挺之、挺之得之於穆伯長、推其源流遠有端緒、今穆李之言及其行事、概可見矣。而先生純一不雜汪洋浩大、乃其所自得者多矣。（二程全書明道文集四）⁽⁴⁾

といい、また門人張嶠の「行狀略」（邵子全書附錄）にも「伯長以上

雖有其傳、未之詳也」と見えて、はじめは穆修（伯長）どまりであった。ところが、所謂朱震（一〇七二—一一三八）の道家一源説⁽⁵⁾出で、系符を陳搏（希夷）にまで遡らせることとなり、朱熹（一一三〇—一二〇〇）に至っては『周易參同契』との関連を説くようになる。

邵子天地定位否泰反類一詩、正是發明先天方圖之義。先天圖傳自希夷、希夷又自有所傳。蓋方士技術用以修煉、參同契所言是也。

（朱子語類卷一〇〇）

このような所説については、名教意識が絡んで論議のあるところである⁽⁶⁾が、いずれにしろこの末初の道家の方士、陳搏に対する邵雍の傾倒ぶりは、彼の他の詩にも多く見られるところであり⁽⁷⁾、陳搏を除いて邵雍を論ずることはできないのである。

曾無寵辱驚

もとより『老子』の「寵辱若驚」を意識してのものである。

ひるがえって、河南共城に在ってさきの李之才（挺之）に接するなど修業を重ねていた邵雍は、皇祐六年（一〇四九）洛陽に居を定め、以後この古都に住んだ⁽⁸⁾。この詩、制作は嘉祐六年（一〇六二）、五一歳のとき。この「放言」に先だってこの年には「謝富丞相招出仕二首」が作られており、上野日出刀氏は「天津橋南の新居が成ったのは翌七年のことである。およそこの頃に彼は晩年の閑静を楽しむ境に踏み入ったのではあるまいか。」と推定されている⁽⁹⁾。

泥空終日着

この句、「學佛吟」（伊川擊壤集卷一四）の「妄欲斷緣緣愈重」などと照応するものであろう。

邵雍が仏教と一線を画していたことは、例えば「佛氏棄君臣父子夫婦之道、豈自然之理哉」（皇極經世卷二下觀物外篇下二八丁）⁽¹⁰⁾という語で知られるが、それは決して同時代の張載のとき強い主張ではなかった。邵雍の息子邵伯溫（一〇五七—一一三四）撰する『河南邵氏聞見前録』に、

康節先公於書無所不讀……以老子爲知易之體、以孟子爲知易之用、論文中子謂佛爲西方之聖人、不以爲過、於佛老之學、口未嘗言、知之而不言也。（卷一九）

と言うのは、むしろ邵雍の仏学への関心を説くものであり、されば下つて朱熹にも仏学との近似性を指摘されることになるのである。

康節之學近似釋氏。但却又挨拶消息盈虛者言之。問、擊壤序中以道觀道等語是物各付物之意否。曰、然。蓋自家都不犯手之意。道是指陰陽運行者言之。又問、如此則性與心身都不相管攝。亡者自亡、存者自存否。曰、某固言其與佛學相近者此也。（朱子語類卷一〇〇）

右に摘出されている『伊川擊壤集』序文中の「以道觀道」については22頁上段に再述する。

齊物到頭爭

邵雍の名著『皇極經世』の書名自体、『莊子』齊物論篇の「春秋經世先王之志、聖人議而不辯」と関連している⁽¹¹⁾し、莊子への理解の深さは觀物外篇その他に見出されるところであり、四に説くが、この「齊物」に関しては「泥空」とともにお気に召さぬようである。

邵雍のものの観方が、莊子の「齊物」とどのように関わるかを解明

しようとするいま、この一句の背景を探ることがまさに本稿の課題となるのである。

忽忽閑拈筆 時時自寫名

例えば皇祐七年の作「閑吟」の起聯は「忽忽閑拈筆、時時樂性靈」であり、筆を拈むことを、閑居にふさわしい仕草の一つに数えていたようである。

誰能苦眞性 情外更生情

邵雍における性と情の区別を説くには、諸家の多く挙げる次の語がやはり良からう。

任我則情、情則蔽、蔽則昏矣。因物則性、性則神、神則明矣。（觀物外篇下二丁）

以物觀物性也、以我觀物情也。性公而明、情偏而暗。（觀物外篇下三丁）

所謂性善情惡説を踏襲するものである。

ここで彼の「放言」を反芻してみよう。——宇宙の実相について定見を得たいまは、世俗の尺度など、とんと気にならぬ。空に拘泥すれば、べつたり執着する結果となり、物を斉しく観ようとしては、相異を意識し、とことん争うことになる。いらざる思惑はさらに捨て、筆を拈り閑にまかせて名を書きちらす。誰が敢て天与の「ちまえ」に抗い、さらぬだに乱れがちな心を乱そうぞ。——かく、情外更に情の生ずるのを抑え、「性」の立場に拠らんとするわけだから、「我」に因らずして「物」に因り、「我を以て物を観」ずに「物を以て観る」ことが絶対条件となるのである。主題に擬した「齊物到

頭争」はしばらく措いて、以降この「以物觀物」について考えたいと思う。

(二)

邵雍思想の一つの柱が陳搏相伝の先天卦圖——図書象数の学であることは論を俟たぬが、いま一つの柱として、その観物説を挙げ得る。

観物の第一歩は「身を以て物を観る」ことにある。自己の立場を中心にして対象物を観ることであり、一つの段階である。

司馬光の「閑來」と題する詩（閑來觀萬物……）に唱和して作った「和閑來」を掲げよう。熙寧五年（一〇七二）、六二歳のとき。

以身觀萬物 身を以て万物を觀れば

萬物理非遙 万物の理は遙なるに非ず

馬爲乘多瘦 馬は乗らるるが為に多く瘦せ

龜因灼苦焦 龜は灼かるるに因りて苦焦す

能言謝鸚鵡 能言は鸚鵡に謝り

易飽過鷓鴣 飽き易きこと鷓鴣に過ぎん

伊洛好煙水 伊洛の好煙水

願同漁與樵 願はくは漁と樵とに同ぜん（伊川擊壤集卷九）

このように「身を以て万物を観る」だけで、相応の境地が開かれる訳であるが、『伊川擊壤集』の序を見ると、この「以身觀物」は未だしきものとして否定され、「以物觀物」が称えられる。

以道觀性、以性觀心、以心觀身、以身觀物、治則治矣。然猶未離
 平害者也。不若以道觀道、以性觀性、以心觀心、以身觀身、以物
 觀物、則雖欲相傷其可得乎。

即ち「以身觀物」が次元を異にする立場からの観察であつたのに対
 し、「以物觀物」は同次元に立つて——と言ふよりは、完全に対象
 そのものになり切つて、その観点からみてゆこうとするものであつ
 て、朱熹によつて「物各付物」であることが肯定され、「自家都不犯
 手之意」であると説明されたことは、既に見た通りである。

思うに、対象と一体であれば、相い傷ること不可能なる道理、こ
 のように観点を換へることの重要性は、時間的側面に関しても唱えら
 れた。

夫古今者、在天地之間猶旦暮也。以今觀今則謂之今矣。以後觀今
 則今亦謂之古矣。以今觀古則謂之古矣。以古自觀則古亦謂之今矣。
 是知古亦未必爲古、今亦未必爲今。皆自我而觀之也。安知千古之
 前萬古之後、其人不自我而觀之也。（觀物篇四五）

このように時間的存在の相対性は立場を換へてみるとき知られるわ
 けで、古今に通じる尺度は、「我よりして之を觀る」ことを超えた時
 点で得られるだろう。邵雍は結局「萬世之事業者、非仲尼之道而何」
 と、儒家的常識に従うが、その拠りどころとしては、「仲尼之所以能
 盡三才之道者、謂其行無轍跡也」（以上ともに觀物篇四五）としてい
 るのは、「無朕に遊ぶ」（莊子應帝王篇の語。郭注、任物故無迹）莊
 子の聖人が想起されて面白い。

さて、このような我よりすることを排除した結果は、次のように

説明される。

聖人之所以能一萬物之情者、謂其聖人之能反觀也。所以謂之反觀
 者、不以我觀物也。不以我觀物者、以物觀物之謂也。既能以物觀
 物、又安有我於其間哉。是知我亦人也、人亦我也、我與人皆物也。

（觀物篇五二）

邵雍觀物（反觀）⁽²⁾の至るところ、「我與人皆物也」というに及ぶ。この
 到達点は例えは張載の「民吾同胞、物吾與也」（西銘）とか、程顥の
 「人與天地一物」（二程全書遺書一一）などと、対比して検討せらる
 べきものであるが、いまは課題に従い、この「觀物」——邵雍的万
 物齊同説と「齊物」との関係の解明に移ろう。

（三）

次の文は『二程全書』遺書二上、二先生語二上に見えるものであ
 るが、程顥の語として⁽³⁾考察を進める。

命之曰易、便有理。若安排定則更有甚理。天地陰陽之變、便如二
 扇磨、升降盈虛剛柔、初未嘗停息、陽常盈、陰常虧、故便不齊。
 譬如磨既行齒都不齊、既不齊便生出萬變。故物之不齊物之情也。
 而莊周強要齊物。然而物終不齊也。堯夫有言、泥空終是著、齊物
 到頭爭。此其肅如秋、其和如春。如秋便是義以方外也。如春觀萬
 物皆有春意。堯夫有詩云、拍拍滿懷都是春。又曰、芙蓉月向懷中照、
 楊柳風來面上吹。又曰卷舒萬古興亡手、出入幾重雲水身。若莊周大
 抵寓言要入佗放蕩之場、堯夫却皆有理、萬事皆出於理。自以爲皆

有理、故要得縦心妄行總不妨。

変易が万物のさだめ、そしてそこに理が存在する。もし固定不變なのならば理の存在理由はな。——次なる、「天地云々」から「物終不齊也」までは、粹言二に次のように整理されているから、参考までに掲げる。

子曰、天地陰陽之運、升降盈虛、未嘗暫息。陽常盈、陰常虧、一盈一虧、參差不齊而萬變生焉。故曰、物之不齊物之情也。莊周強齊之、豈齊也。

万物は不齊という条件のもとに生成するのだから、斉同である訳がない。——文中の「物之不齊物之情也」は、『孟子』滕文公上の語。

——しかるに莊周は理不尽にも斉物を唱えたから、われらが邵雍の指弾を受けることとはなったのだ。

それにしても、と、程顥は考える。——邵雍ははじめに厳しい中に、ものを見るまなざしの何と暖かく和やかなことよ。物を斉しくすることの不可なるを言う場合も、一概に否定するのではなく、調和を失い争う結果になるからとて退けたのだから。拍拍云々の句⁽¹⁴⁾にしても、芙蓉云々の句⁽¹⁵⁾にしても、そして卷舒云々の句にしても、ともすればかの放蕩の世界に引き入れがちな莊周とは異り、天地との合体を説く奔放な表現の中に、秩序の是認がみられるではないか。邵雍は、なべてのものは理を具有し、よろずの現象が理に支えられているのはつきり自覚していた。その粹組のなかでは、いかなる縦心妄行も総て妨げないと考えているのだ。——程顥が邵雍を戯れにはあるが、「亂世之姦雄中、道學之有所得者」⁽¹⁶⁾と評したことはよ

く知られている話柄であり、「縦心妄行」の語は必ずしも唐突ではない。結局、程顥は「理」を認めるか否かに焦点を合せて莊周と邵雍との差をみようとしたのである。ついでながら、莊周と邵雍の比較という観点から、朱熹のものも一瞥しておこう。

問程子謂康節空中樓閣。曰、是四通八達。莊子比康節亦髣髴相似。然莊子見較高氣較豪。他是事事識得了、却又蹴踏着以爲不足爲。康節略有規矩。然其詩云、賓朋莫怪無拘檢、眞樂攻心不奈何。不知是何物攻他心。(朱子語類一〇〇)

右の「程子」は、語が二先生語に見えるので、程顥か程頤か定かではない。ともあれ朱熹は邵雍を、莊周に較べ規矩ありとしながらも、その奔放自在なるに付き合いかねる、とした。その差異を論じて必ずしも明確ではない。となれば、程顥がいかに宋代らしく、「理」の認識の有無で莊・邵の別を説いたのは、この際、大いに参考になるのである。

さてこの「理」について考えよう。(二)に掲げた「和閑來」の「以身觀萬物、萬物理非遙」の理は、いわば理一般であったとして、邵雍が取り立てて「理」を説く場合は、やはり『易』說卦傳の「窮理盡性以至於命」の文脈に即することが多い。

理窮而後知性、性盡而後知命、知而後至。(觀物外篇下一丁)

天使我有是之謂命、命之在我之謂性、性之在物之謂理。(觀物外篇下二五丁)

これらはアレレンジせる例。そうして「観物」との関連で言えば、次のようになる。

夫所以謂之觀物者、非以目觀之也。非觀之以目而觀之以心也。非觀之以心而觀之以理也。天下之物莫不有理焉、莫不有性焉、莫不有命焉。(觀物篇五二)

自然必然の「理」が物そのものと一体に存在することを認めるとき、「觀之以理」は「以物觀物」——「觀物」と同義となる。かく、邵雍は万物の斉同なる根拠を「理」に置いた。「理」に於いて万物の斉同なるを見出した、と言い換えてもよい。このように「觀物」——

邵雍的万物斉同説の根底には、その易学、就中、数——理よりする自信が存在した。これは確かに莊周の立脚点とは相異なる。周知の如き「以明」、「不因而照天」、「寓諸庸」、「休乎天鈞」、「因是」、「寓諸無竟」といった『莊子』齊物論篇に見られる斉同の拠りどころは、大胆に言ってしまうと「天」の一語に尽きよう。同じく齊物論篇に見える「萬物與我爲一」にしても、これに(二)で見た邵雍の「我與人皆物也」を対すれば、あらわれとしては大いに似るようだけれど根ざすところは異っていたのである。一は天、一は理。このように「天」において斉同であり、その次元から唱えられた莊周の「齊物」に、その意味からの接触は、邵雍に見られない。それには触れず——触れれば或は「儒」たるを失うやも知れぬ——ひとえにさかしらに拘われた低次元のものとして扱ったが故に「齊物到頭爭」なる「放言」がなされたと思われるのである。

右のことからの経緯は、次の語に明らかである。

莊子齊物未免乎較量、較量則爭、爭則不平、不平則不和。無思無爲者、神妙致一之地也。聖人以此洗心退藏於密。(觀物外篇下二七)

丁)

いうまでもなく「聖人云々」は、『易』繫辭傳の言葉、邵雍は「無思無意」を言いつつ、つまりはやはり『易』に依拠したのであって、「道学」の限界はついに越えなかった。

(四)

以上、莊・邵の差異を見来ったが、他の面でもこの傾向はみられるのであろうか。否、莊周の「齊物」に同意しなかった邵雍も、『易』説卦傳に「窮理」とならんで唱えられる「盡性」の、その側面については、莊周の所得に惜みない共感を示す。「川上觀魚」と題する詩を掲げよう。嘉祐七年(一〇六二)五二歳の作。

天氣冷涵秋 天氣冷えて秋を涵し

川長魚正遊 川長くして魚正に遊ぶ

雖知能避網 知能く網を避くと雖も

猶恐悞吞鈎 猶悞りて鈎を呑まんことを恐る

已絶登門望 已に登門の望を絶ち

曾無點額憂 曾て点額の憂無し

因思濠上樂 因りて思ふ濠上の樂

曠達是莊周 曠達なるは是れ莊周(伊川擊壤集卷四)

着目すべきは「濠上樂」の語である。解説も兼ねて觀物外篇下二六

丁に見える邵雍自身の語を見よう。

莊子與惠子遊濠梁之上。莊子曰、儻魚出遊從容、是魚樂也。此盡

物之性也。非魚則然、天下之物皆然。若莊子者可謂善通物矣。

「……魚樂也」までは『莊子』秋水篇の語。よく知られるように、それに対して恵子が「子非魚、安知魚之樂」と、否定にかかったところ、莊子が絶対の境地に立てばまさに万物斉同、それが可能なのだ、と説いた部分である。「此」以降の邵雍の説明、まことに『莊子』に対する理解の深さを語るものである。「盡性」なる尺度に照して褒められたとあれば、莊周あるいは苦笑するかも知れぬが――。

右に類する例は少くない。

莊周雄辯數千年一人而已。如庖丁解牛曰踰躡四顧、孔子觀呂梁之水曰蹈水之道無私、皆至理之言也。（觀物外篇下九丁）

「庖丁解牛」は養生主篇。踰躡は躊躇に同じ。「孔子觀呂梁之水」は達生篇。

莊子氣豪、若呂梁之事、言之至者也。盜跖、言事之無可奈何者雖聖人亦莫如之何。漁父、言事之不可強者雖聖人亦不可強。此言有爲無爲之理。順理則無爲、強則有爲。（觀物外篇下二八丁）

「盜跖」、「漁父」ともに篇名。

莊子曰、庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之。此君子思不出其位、素位而行之意也。（觀物外篇下二八丁）

「庖人……」は逍遙遊篇。これを解するに、『論語』『易』『禮記』の語を以てした。このような言説は、例えば明代の楊慎に称揚せられる例など、相応の説得力を持つものであり、以上の觀察からして、前述の「齊物」批判は、邵雍による莊周評一般からすればむしろ特殊なものであったことを知るのである。

何故に「齊物」について同意しなかったのか。単に名教意識のなせるところ、低次元のものとしたからか。とすれば「特殊」の意味が解明できぬ。やはり邵雍自身の思想の一つの柱「觀物說」樹立の關係から、これを比較対的に高めんがため、特に「齊物」を低く見たことが考えられてくる。

さらに憶測を逞しうすることが許されるならば、いましがた見た「若莊子者可謂善通物」の「通物」にしても、本来「觀物」乃至は「齊物」と言うべきところではなかったのか。言い得なかつた訳は、――觀物と言わんか、自らうち開いた觀物の境地を莊周に許すことになる。齊物と言わんか、自己の用語基準を乱すことになるのである。

(五)

さて邵雍の「齊物」觀が以上の如くであつたとして、これを『莊子』齊物論の扱い方の歴史からみれば、どのような位置づけになるか。以下「齊物」から「觀物」への移行の背景を、更に角度を変えて考察したい。

邵雍より二世紀ほどを経て王應麟（一二二二―一二九六）の言うよう、

齊物論、非欲齊物也。蓋謂物論之難齊也。是非毀譽、一付於物、而我無與焉、則物論齊矣。邵子詩謂齊物到頭爭、恐誤。（困學紀聞

右は本稿にとって二つの意味で重要な資料である。一は、蓋し『莊子』齊物論を、物論を齊しくすと訓む説の代表的なものである点。いま一つは、主題「齊物到頭爭」に直接言及している点。後者については勿論後にふれる。

さて、物論を連続することは、王應麟と前後して林希逸⁽¹⁸⁾・劉辰翁⁽¹⁹⁾・褚伯秀⁽²⁰⁾が行っており、南宋にあつてはむしろ普通の訓み方となつていたのかも知れぬ。以降、明を通じ清に入つても、一部の例外⁽²¹⁾を除いては、物論を連続することとはなつた⁽²²⁾。

一八世紀の終り、錢大昕（一七二八—一八〇四）は前掲の王應麟の文を引用したあと続けて言うよう、

按左思魏都賦、萬物可齊于一朝、劉涓子注云、莊子有齊物之論。劉琨答盧諶書云、遠慕老莊之齊物、近慕阮生之放曠。文心雕龍論說篇云、莊周齊物、以論爲名。是六朝人已誤以齊物兩字連讀、唐人多取齊物兩字爲名、其誤不始康節也。（十駕齋養新錄卷一九）

この錢大昕の指摘は、南宋以来続いた「物論」説の総括とも言つべきもので、晋以降に「齊物」の用例のある⁽²³⁾のを、逆に誤謬の例とし、歩一步を進めて「物論」説を強化したものである。一九世紀に入つても「物論」を採る人は多かつた⁽²⁴⁾。

このような一方的に「物論」説に傾く流れに抗し、二〇世紀初頭、章炳麟の「齊物論釋」⁽²⁵⁾が出た。

齊物屬讀、舊訓皆同。王安石呂惠卿始以物論屬讀。不悟是篇先說喪我、終明物化、泯絕彼此、排遣是非、非專統一異論而作也。應從舊讀。因物付物、所以爲齊。故與許行齊物不同。

「許行齊物」とは、『孟子』滕文公上に見える話。孟軻は「夫物之不齐、物之情也」——本稿では22頁下段及び註⁽²⁰⁾に既出——として、これを非難している。

さてこの断案によつて「齊物」説が復活したばかりでなく、一層の光彩を加えられ、以降「齊物」に従う人が多い⁽²⁶⁾のは尤ものことと思ふが、他に、「物論」説の発生を王安石・呂惠卿の、北宋にまで押し上げていることが注目される⁽²⁷⁾。もつとも前掲の王應麟の文では「…恐誤。」に引続いて、北宋の張耒に「物論」説のあつたことが述べられており、されば「王安石・呂惠卿・張文潜・王伯厚…」と「物論」説の系符を述べる人（王叔岷）も出ることになる。しかしいま王安石の子王雱の『南華經新傳』には「齊物之篇」なる語が見え、必ずしも安石父子が「物論」説を明確に意識していたとも思えない。——いずれにせよ、唐代までは「齊物」と連読されてきたものが、宋代に至つて「物論」説が抬頭し、長くこれに拠る人が多かつたのは事実であり、そこでこの「物論」説の発生に、思想上の情況を重ね合せてみるなかで、邵雍の「齊物」観をいま一つ明確にしたいと思うのである。

手がかりを馬敘倫『莊子義證』に求めよう。馬氏は前掲錢大昕の挙げた『文選』の二例を引用した後、言うよう、

晋人崇尚玄學。皆不以物論二字連讀。

語を裏がえせば、宋人崇尚理學、故以物論二字連讀、となりはしまいか。宋代に至つて分析的傾向が強まり、理への関心が高まつたのはよく説かれる通りとして、今その代表的思想家である程頤（一〇

三三——一〇七)の「齊物」觀をみよう。

孟敦夫問、莊子齊物論如何。曰、莊子之意欲齊物理耶。物理從來齊、何待莊子而後齊。若齊物形、物形從來不齊、如何齊得。此意是莊子見道淺、不奈胸中所得、何遂著此論也。(二程全書二二上) 早い話が莊周に従えば、癡病やみ(厲)とかの西施も、庸に寓することと齊同となるわけだから、程頤の論の当否はさておき、ここでは「物理」と「物形」とを分けて論じていることに注目したい。このような分析的思惟がおこなわれた時代を背景に、「物論」の連読が発想された、と考えられるのである。玄学的に受け止めることから理学的解釈へ——、その転換期に、邵雍は位置する。とすれば、齊物と物論の対立という図式に、邵雍の「齊物」觀を填め込んでみると、後者に属する可能性がある。事実、邵雍は前述の如く、齊物↓較量↓争↓不平↓不私の経過を指摘した。これは「齊物」と言いながらも、後の用語に従えば「物論」説と言わねばならぬ。このように分析的風潮の然らしむところ、齊物論へと傾き、その角度から「齊物」に疑問をなげかけたところに、邵雍の「齊物」觀のもう一つの特徴がある。しかも「物論」説が力点を異論の統一に置きがちなのは、註(18)〜(20)、(24)の諸例に見られる通りとして、その場合「喪我」に齊物論の要諦をみる人が多いのに対比するとき、相對の場に固執する邵雍の「齊物」觀は、その限りではやはり次元を異にするものであった。

さればこの邵雍の「齊物」觀は、前述のように物論説の代表王應麟によって否定されたのであった。即ち「齊物到頭争、恐誤」である。

思うに、王應麟が一つには「物論」とすべきであるという立場から、「齊物」の表現を咎めた点は、それは認めねばなるまい。即ち、錢大昕が「其誤不始康節也」という意味での「誤」である。しかし更に考えれば、もう一点が指摘されている筈である。即ち、ここで王應麟の言葉を繰り返すことになるが、「是非毀譽、一に物に付し、我与る無ければ則ち物論齊し」きわけで、さすれば、王氏言う真の意味の齊物論に拠るときは「到頭争ふ」こと自体あり得ぬという点である。換言すれば、異論の統一方法に無理解である、という点が指摘されているのである。因みにこのことは、「齊物」説復興の代表格に擬した章炳麟の立場からは、更に強く指摘さるべきは言うまでもない。齊物論とは、「彼此を混絶し、是非を排遣する」ものであって、「専ら異論を統一せんが為に作れるには非ざるもの」であつたからである。

このように見來つて、他の莊周齊物論の理解者⁽²⁾に比しての邵雍の異端者ぶりが浮彫りされたが、この姿を見掛けのままに受けとめておいてよいのだろうか。それは単に皮相に過ぎず、邵雍思想全体からみれば、むしろその内実を吸収していたのであつて、王應麟の提示した「一付於物、我無與焉」という齊物論の条件は決して無視されていたわけではなく、夙に明確に踏まえられていた。言うまでもなく、「不以我觀物、以物觀物」——觀物説の構築に他ならない。

むすび

総じて、(三)にみた名教意識、(四)にみた独自性追求の意欲、傍らに(五)にみた分析的風潮、これらが結って、邵雍をして「斉物」を相對の場に引き据えて処理せしめたものであって、觀物説を描き上げるためには、そのための「空白」が用意されねばならなかったのである。以上、邵雍の「觀物」成立の道筋に、一条、莊周「斉物」の批判的繼承の跡を見出し得たものと思う。

註

- (1) 後掲の諸論考を除くの外、参照し得たもの。
上野日出刀「邵雍の生涯と詩」(一九六八年、筑摩書房、吉川博士退休記念中國文學論集所収)
戸田豊三郎「邵康節父子の思想」(広島大学文学部紀要第二八卷一号)
山室三良「邵康節の人物と風懷」(福岡大学人文論叢第三卷第三号)
三浦國雄「皇極經世書」(一九七三年、朝日新聞社、川勝義雄編史學論集所収)
- (2) 三浦國雄「伊川擊壤集の世界」(東方學報京都部第四七冊)
從來認康節思想偏近道家、其實是更近莊周。康節精於象數之學、近似西漢陰陽家、但康節象數學之背後、另有一套哲理根據、却與西漢陰陽家不同。我想稱此一派爲觀物哲學、前有莊周、後有康節、這一派哲學、在中國思想裏更無第三人堪與鼎足媲美。(P 103)
- (3) 「伊川擊壤集」は四部叢刊本による。
- (4) 「二程全書」は四部備要本による。
- (5) 今井宇三郎「宋代易學の研究」P 82、102 参照。

- (6) 例えば陳淳(楠本正繼、宋明時代儒學思想の研究 P 30 参照)、錢大昕(十駕齋養新錄卷七程邵之學)など。
- (7) 「閑坐吟」(伊川擊壤集卷四)、「觀陳希夷先生眞及墨跡」(同上卷二二)など。
- (8) 上野日出刀「邵雍伝」(久留米工業短期大学研究報告第一号)、山室三良「再び邵康節について」(福岡大学人文論叢第四卷第一号) 参照。
- (9) 上野日出刀「邵雍の詩について」(久留米工業短期大学研究報告第二号)。「皇極經世」は道藏所収本による。なお以下觀物篇云々、觀物外篇云々のように省略に従う。
- (10) 大島晃「邵康節の「觀物」」(東方學第五二輯) 参照。
- (11) 右大島論文参照。
- (12) 外書一に「邵堯夫詩曰、梧桐月向懷中照、楊柳風來面上吹。明道曰、眞風流人豪」と。
- (13) 一つおいて後の卷舒云々の句と共に、「安樂窩中酒一樽」(伊川擊壤集卷九)に見ゆ。なお安樂窩とは邵雍の住居。河南輝縣百泉公社大批判組「邵雍及其「安樂窩」批判」(文物、一九七六年第五期)によれば、門樓・台閣などの遺址が現存する。
- (14) 芙蓉月云々が梧桐月云々となって「首尾吟」(伊川擊壤集卷二〇)の中に見ゆ。
- (15) 「二程全書」遺書二上
- (16) 「丹鉛總錄」卷一
- (17) 物論者人物之論也。猶言衆論也。齊者一也。欲合衆而爲一也。(南華眞經口義)
- (18) なお右とはば同じ表現のものが、以下の諸本に見られる。いずれも明人。李廷機等「南華經句解」、陳榮選「南華全經分章句解」、馮夢楨「南華眞經重校」、韓敬「莊子孤白」、黃正位「莊子南華眞經校訂」。
- (19) 或謂莊子欲齊物論、非也。欲齊則愈不齊矣。不是齊他物論、是自看得他物論原自齊。看得齊則心平、心平則無物論矣。(莊子南華眞經點校)
- (20) 孟子曰物之不齊物之情也。而莊子名篇以齊物論。或疑其與儒家悖重增不齊之情、殊不思孟子特爲許子言之耳。況孟之所言者情、莊之所言者理、

理一分殊則情之不齊也宜矣。故南華原本極主一理以齊天下之物論。(南華真經義海纂微)

- (21) 明末譚元春の「遇莊」には、「夫齊物之書非齊物也、物化之爲齊物」と見え、また周拱辰の「南華真經影史」には、「齊物一篇、非齊物也、齊我也」と見ゆ。

- (22) 朱得之：物論者、衆論也。齊之者、合彼此是非而一之也。(莊子通義)

歸有光：欲齊天下之物論、必觀諸未始有物之先。(南華真經評注)

なお右と同じものに楊起元「南華經品節」、徐曉「南華日抄」がある。いずれも明人。

陸長庚：夫知有大小、見有淺深、物論之所由、以不齊也。(南華真經副墨)

沈一貫：物論紛紜、自儒墨以至堅白同異之倫、各爲其所欲焉。(莊子通)

陸可教等：有是有非、物論之不齊也。(莊子玄言評苑)

陳深：物論所以不齊者、見得世間有死有生、有可有不可、殊不知不可不可

本一貫、死生本一條、本無不齊也。(莊子品節)

李贄：我尚無矣、知何從生。是非一致、物論自齊。(莊子解)

吳伯與：我忘而物論無由起矣。(南華經因然)

釋德清：物論者、乃古今人物衆口之辯論也。(莊子內篇注)

郭良翰：大凡物論不齊、皆始於有我。(南華經實解)

劉士璉：物本自齊、人以我故而有是非彼此分別、物之不齊盡緣於此。(南華春點)

方虛名：物論不齊、思以齊之。(南華真經旁注)

王夫之：不立一我之量以生相對之稱、而惡有不齊之物論乎。(莊子解)

宣穎：天下物論爲何紛多。(南華經解)

林雲銘：明道之言、各有是非、是謂物論。物論之不齊、皆起於各自爲我之心。(莊子因)

高秋月：物論所以難齊者、因有我見。我苟不立、彼尚何存。(莊子釋意)

浦起龍：篇意主于融化羣言。物論二字連讀。(古文眉詮)

陸樹芝：辨別事物之是非而必申其說、是爲物論。(莊子雪)

- (23) 連読の例として錢氏の挙げる左思・劉琨・劉勰のものの外、朱桂曜は、

稽叔夜琴賦——朱氏は馬季長長笛賦に誤る——「齊萬物兮超自得」、王康瑒

反招隱「與物齊終始」それぞれに李善が「莊子有齊物論」と注する例を加えて、これらも「齊物」連読の嫌で「同誤」とする。(莊子內篇證補)

これに対し、王叔岷はさらに夏侯莊周贊「逐世放言、齊物絕尤」を加え、こちらは「莊子之本意在論齊物明矣」とする。(莊子校釋)

- (24) 胡方：齊物論者、齊諸家言道之論也。(莊子辯正)

屈復：物者彼我、論者是非。喪我物化、道通爲一、則皆齊矣。(南華通)

陳治安：莊子作齊物論者、謂物論不齊、吾因其不齊者與之、俱不齊而後

無不齊、欲已辯也。(南華真經本義)

吳世尚：齊一也。物論衆論也。(莊子解)

方潛：純真任天因其固然、不用而寓諸庸、物論不齊而自齊也。(南華經解)

錢澄之：欲齊是非必先喪我、喪我則生死皆齊、又何物論之不齊乎。(莊屈合話)

陳壽昌：物論紛紜、是非之門、一入其中、迷不復出、幾若此外別無天地。

(莊子正義)

劉鳳苞：戰國時處士橫議、物論紛紜。(南華雪心編)

楊文會：下文種種不齊之物論、皆從喪我一法而齊之。(南華經發隱)

王先謙：天下之物之言皆可齊一視之。不必致辯、守道而已。蘇輿云、天

下之至紛、莫如物論、是非太明、足以累心。(莊子集解)

- (25) 荒木見悟「齊物論釈訓註(その一)」(哲學年報第二九輯) 参照。

- (26) 林紓「莊子淺說」、馬敘倫「莊子義證」、王叔岷「莊子校釋」、曹受坤「莊子哲學」(付莊子內篇解說)、錢穆「莊子纂箋」など。

- (27) 錢穆「莊子纂箋」には言う、「錢大昕曰、王伯厚前、王安石呂惠卿等、已發其說」(其説とは物論連読説)と。

- (28) 批判者を含め、「齊物」を論ずるものは、遑って「抱朴子」勸求など数は多い。本稿ではそれらの一部に当たったに過ぎぬ。

(人名・書名・引用部分は正字を用いた)